

令和3年8月6日（金）

主催：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

協力：株式会社キミコン

令和3年度
おきぬのめきた
沖布目北遺跡
発掘調査 現地説明会



うめがめ けんしゅつ
埋蔵の検出状況



発掘作業の様子

1 おきぬのめきた 沖布目北遺跡と発掘調査の概要

坂井市の沖布目北遺跡は、坂井平野を流れる兵庫川^{ひょうごがわ}左岸に位置しています。坂井平野は九頭竜川^{くすりゅうがわ}・竹田川^{たけだがわ}・兵庫川などの河川により形成された沖積平野^{ちゅうせきへいや}です。坂井平野では、これまでの発掘調査によって約 5400 年前から約 2400 年前（縄文時代中・後・晩期^{たてあなじゅうきよ ほったてばしらたてもの いこう}）の竪穴住居^{うめがめ}や掘立柱建物などの遺構が発掘されてきました（図 1）。沖布目北遺跡ではこれまで発掘調査は行われていませんでしたが、福井港丸岡インター連絡道路の改良工事に伴う発掘調査を本年 12 月まで実施し、8 月までに 1 区と 4 区の調査を終了する予定です。

1 区と 4 区の調査では、縄文時代の埋甕^{じょうもんじたい}や多数の柱穴^{うめがめ}などの遺構のほか、主に縄文・弥生時代の土器や石器などが出土しました。

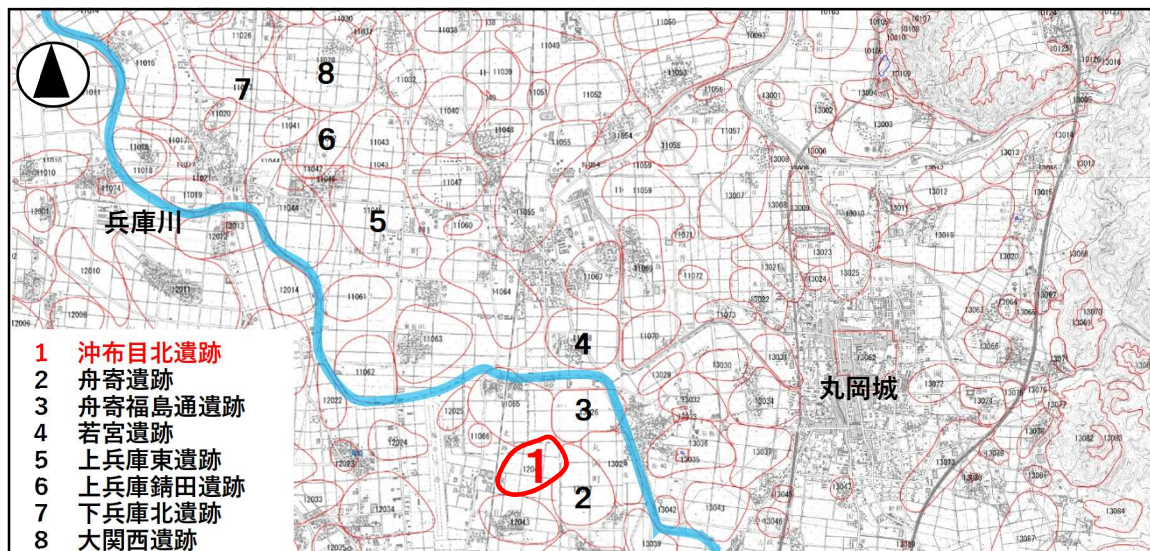


図 1 これまでに発掘調査された縄文時代の主な遺跡

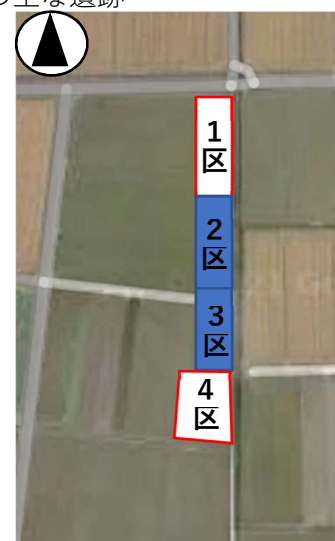
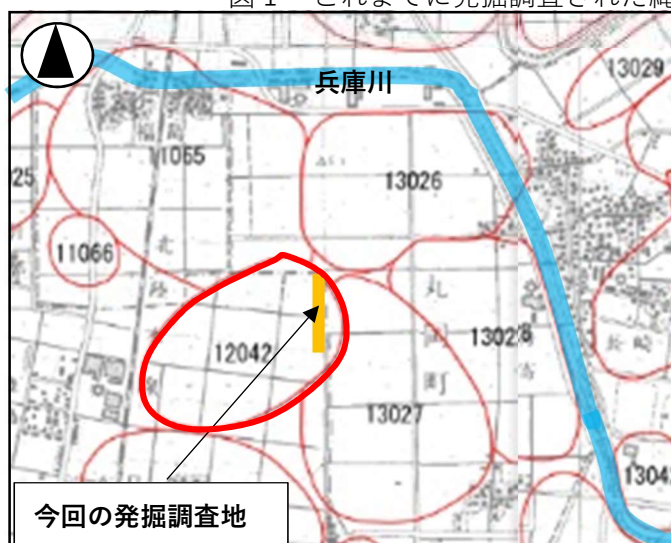


図 2 沖布目北遺跡の発掘調査地の位置

2 1区の遺構・遺物出土状況

① 柱穴

1区では、数か所で長径40センチメートルほどの楕円形の掘方をもつ柱穴を検出しました。いくつかの柱穴では、内部に柱が残っていました。縄文時代後期の掘立柱建物の一部である可能性があります。



写真1 柱穴

② 石皿

長径20センチメートルほどの楕円形の石皿が、ほぼ水平の状態で見つかりました。据え付けられた可能性も考えられます。

1区からは磨石も多数出土しており、縄文時代の人々が、植物資源を加工した痕跡だと考えられます。

縄文時代後期の生業構造を考える上で、貴重な資料となりました。



写真2 石皿

③ 土器だまり

1区からは深鉢・浅鉢・注口土器といった土器も多く出土しており、一部は土器だまりを形成している可能性があります。



写真3 土器の出土状態

3 4区^{いこう}の遺構

4区^{いこう}の発掘調査では、縄文時代の埋甕^{うめがめ}10基以上、多数の柱穴^{ちゅうけつ}や土坑^{どこう}などの遺構を確認しています。調査区の北側では落ち込み状にくぼんでおり、出土する遺物も少なくなります。

① 埋甕^{うめがめ}（土器^ど埋設^{まいせつ}遺構^{いこう}）

埋甕^{うめがめ}を10基以上確認することができました。縄文土器^{じょうもんどき}を地面に埋めており、土器^{どき}の底に穴^{うが}を穿ったものもあります。また、土器^{どき}の口縁^{こうえん}が欠けた状態で確認したものがほとんどです。この遺構^{いこう}は儀礼^{ぎれい}・呪術^{じゆじゆつ}に関するものや小児^{しょうに}や胞衣^{えい}の埋葬施設^{まいざうしせつ}などの可能性があり、建物の屋内^{うち}にも屋外^{ぐわい}にも設けられます。今回の調査区でも、柱穴群^{ちゅうけつぐん}に近接した場所で複数の埋甕^{うめがめ}を確認しています。



写真4 埋甕^{うめがめ}の出土状況（左：埋土完掘^{まいどかんくつ}状況 右：断面状況）

② 柱穴群^{ちゅうけつぐん}

縄文時代後期になると、縄文中期までの^{たてあな}竪穴建物^{たてあなたてもの}だけではなく、掘立^{ほったて}柱建物^{はしらたてもの}も増えてきます。3区では主に調査区の南側から中央にかけて、建物の上屋^{うわや}を支えたと考えられる縄文時代の柱穴^{ちゅうけつ}を多く確認することができました。これらの柱穴群^{ちゅうけつぐん}の中には環状^{かんじょう}に並ぶ一群^{いっぐん}がいくつかあり、各々が1棟の建物と推定しています。柱穴の深さは30センチメートル程度のものが多いです。



写真5 柱穴^{ちゅうけつ}の断面状況

4 遺物（1・4区）

① 縄文土器

縄文土器と弥生土器は野焼きで作られた土器です。縄文土器は主に深鉢（甕）・浅鉢・注口土器などの器種があります。土器の文様から縄文時代のいつの時代に作られたのかを推定することができます。後期前半の土器が最も多く、そのほかに中期後半と晩期後半の土器が少量出土しています。



写真6 縄文土器の破片（縄文中・後・晩期）

② 弥生土器

弥生土器は遺構の上に堆積する遺物包含層から出土しています。弥生時代の遺構は明確に確認できませんでしたが、土器が少なからず出土しているため近辺に弥生時代の集落があった



写真7 弥生土器の破片（弥生中期）

った可能性があります。弥生時代中期に作られており、表面に条痕調整（貝殻などで土器の表面をひっかく）や突帯文様（紐状の粘土を貼り付ける）があることが特徴です。

③ 石器

縄文土器とともに多くの石器が出土しました。打製石斧（土堀具）や磨製石斧（木材の伐採・加工具）のほかに、石錘（網漁具）や磨石（植物加工具）、石鏃（狩猟具）が主に出土しています。また、石器未成品の出土から、石器製作もしていたようです。



写真8 左半：磨石・石錘 右半：石斧・石鏃

④ 土製耳飾り

縄文時代の女性は耳たぶに円盤状の耳飾りをつけていました。また、かんざしや首飾り、腕飾りなどを身に付けていたと考えられています。本遺跡からは、直径2～4センチメートル程度の土製耳飾りが複数出土しています。表面には赤色顔料を塗っており、装飾性を高めています。



写真9 土製耳飾り

5 調査の成果

- 本遺跡の発掘調査では、縄文時代後期ごろの遺構（柱穴や埋甕）を多く確認することができました。柱穴は人々が住んでいた建物、埋甕は儀礼や埋葬施設などと推定されています。このことから、当時このあたりに生活拠点、つまり「集落」があったことがわかりました。
- 本遺跡周辺では、舟寄遺跡（縄文時代中期）や舟寄福島通遺跡（縄文時代晚期）という、縄文時代の集落が発掘調査によって明らかにされていました。本遺跡についても、複数の建物や埋甕のほか、多くの土器や多種多様な石器、石器未成品、耳飾りを確認しており、縄文時代後期の集落としての要素を備えているといえます。
- これまで縄文時代の集落は山地縁辺に位置する段丘上に主に分布することが一般的と考えられてきましたが、本遺跡やこれまで調査されてきた舟寄遺跡などの例にあるように、沖積地である坂井平野に縄文時代の集落をあらためて確認できたことは、重要な成果です。